

令和元年度第 1 回沖縄県発達障害者支援体制整備委員会 議事録

日 時：令和 2 年 3 月 26 日（木）18：00～20：30

場 所：県庁 5 階 子ども生活福祉部会議室

出席者：

(1) 委員

勝連 啓介	医療法人へいあん平安病院小児科・児童精神科専任科長
原田 聰志	独立行政法人国立病院機構琉球病院
溝口 哲哉	特定非営利活動法人
	おきなわ障がい者相談支援ネットワーク理事長
東 由美子	県教育庁八重山教育事務所指導主事
名倉 彰子	独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構
	沖縄障害者職業センター所長
知花 正	読谷村健康福祉部福祉課長
仲村 磨美	南部地区発達支援研究会“すくらむ”
城間 園子	琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻准教授
寺田 明弘	ゆいま～る法律事務所弁護士

(2) 事務局

子ども生活福祉部障害福祉課

大城 行雄（課長）、小渡 順子（地域生活支援班長）、多和田 成子（主任）

(3) 関係課

保健医療部

地域保健課

金城 房枝（母子保健班長）

教育庁

義務教育課

喜久川 洋（義務教育指導班長）

県立学校教育課

新垣 ゆかり（特別支援教育室主任指導主事）

子ども生活福祉部

子育て支援課

上間 勝盛（子育て班長）

<議事録>

（開会）

（資料の確認）

（開会あいさつ）

（委員の自己紹介）

（議事進行）会次第 2. 議事に沿って事務局及び沖縄県発達障害者支援センターより説明及び報告。

(1)新・沖縄県発達障害児(者)支援体制整備計画(旧計画)の第 4 章数値目標及び主な実績一覧(進捗状況)の報告

(2)①第3期沖縄県発達障害者支援体制整備計画(現行計画)について

②第3期計画(現行計画)の推進体制と進捗管理のあり方

〈事務局説明〉

(3)報告事項

①発達障害児(者)支援機関連絡会議であがった意見等

〈事務局説明〉

②センター連絡協議会の報告

〈沖縄県発達障害者支援センター説明〉

③市町村窓口職員への研修等について

④岡山件及びおかやま発達障害者支援センター視察報告

〈事務局説明〉

(4)提案事項

①岡山県等の視察を終えて検討した事項について

〈事務局説明〉

(休憩)

(質疑・応答)

〈勝連委員〉

・資料2-②の事務フロー図等資料の下図について、第3期計画の進捗管理をどこが行うかの図だと思う。ここに支援機関連絡会議があって、これは実際に動いているという話で、これが、資料3の1ページに実際その連絡会議があったということで報告があった。ところが、これを見てみると、連絡会議が開かれて、様々な意見が出たということは、進捗として評価できると思うが、内容を見てみると、課題がここでもあがっているが、どれも既に体制整備委員会やセンター連絡協議会であがった課題と同じに見えて、連絡会議の位置づけについて、難しいと捉えている。

・進捗管理をしてくれるということで、連絡会議に期待しているのは、ここがリードし

てくれたり、指導的な意見が出てきたりする場だったらいいと思うが、どうもそれが違うように思える。

・資料3、25 ページの岡山県の視察を終えての提案事項というのがあるが、この下部組織というのは、連絡会議の下によくあるプロジェクトチームやワーキングチームというものが何本かぶら下がるそういうイメージで捉えていたらいいか。

〈事務局〉

・第3期計画では、支援機関連絡会議の下部組織として、実務者レベルで会議を持つ場として支援機関実務者会議という組織があって、それが行われているという話です。

〈勝連委員〉

・ということであれば、実務者会議は第3期計画の進捗管理を目指す会議ということになるが、構成員の想定はあるのか。

〈事務局〉

・構成員としては支援機関連絡会議を構成する課の担当班長レベルで構成しています。

〈勝連委員〉

・今後、医療の分野でも課題があがっていて、専門医療機関の不足に対してというところでも、この実務者会議が活発に活用できたらと思っているが、その辺の構想、構成員も含めて伺いたい。

〈事務局〉

・委員のおっしゃるとおりで、担当班長が集まって話し合う場である実務者会議でも、全部の関係機関が集まって話し合うので、限られた時間で、細かい課題を検討する時間が設けられてなかったというのを、岡山県の視察を終えて感じるところがありました。次年度以降になるが、実務者会議を細分化すること、ライフステージごとのテーマに沿ったものでもいいし、ライフステージを通じたテーマにそったものでもいいので、少し再構成して会議を持ちたいと考えています。

〈勝連委員〉

・一つのアイデアだが、医師に対する研修の制度は、かかりつけ医等発達障害対応力向上研修がこれからも柱になっていくと思うが、そういう研修は、多層的にあった方がいいと思うので、これも、実務者会議でがじゅま～るの方から課題としてあがっているが、医療の関係機関も、例えば小児科学会とか、小児保健協会とかたくさんあるので、その代表者等に協力を要請していくといいのかなと思う。

〈事務局〉

・貴重なご意見ありがとうございます。事務局としても、勝連委員と同じようなことを考えておりました、実務者として県の発達障害者支援の事業を持っている関係課、そこからさらに事業を受託している事業所も集まって、実務者会議が持てればというのを考えているところです。

〈勝連委員〉

・もう一点、研修は OJT とかも含めてやれたほうがいいのかと思うので、そういう意味では、沖縄県内での研修指定病院というのは、小児科の研修プログラムを持っていたり、精神科の研修プログラムを持っていたりする所がいくつかあるので、そこでシラバスを作成している医師も呼べたらいいなというのは、個人的に思うところ。

・もう少し言うと、早くこういった構成員を含めての実務者会議を医師の研修プログラムのというところでも、早く実施したい。実務者会議のモデルというものが、医師の研修という課題を話し合う場からできていったらいいと思う。

〈事務局〉

・ありがとうございます。

〈城間委員〉

・今、発達障害に関する学会などに行くと、部局横断した又は、部局内での段階を踏んでの研修体制、シラバスを組んで、初任の段階、中堅、ベテランという形で、それをまた OJT にしていくという体制を整えた自治体かなり多くて、岡山がそれに近い形で進められていると思っているが、沖縄県としては、どのように進めているのかということに疑問がある。

・研修に関しても、県でも福祉や医療、教育等各分野の研修があちこちでたくさん実施されているが、少し形骸化している、研修として積み上がっているのかと感じている。前の体制整備委員会でも話したが、研修として積み上げていくような仕組みにもう一度作り直す時期にきていると思っている。

・部局横断もそうだが、県として、体制整備計画の中で、目標・指標を示した上で、それに向かって各機関が何を目指していくのかという目標を作った上で、それぞれの形で動いていく、それを動かすために、実務者担当の部分で課題を改善するために、どのように実施していくのかという部分が必要だと、このポンチ絵の中では、それが示されていると思っていた。

・実務の部分でワーキングをどう持って行くのか、その中で、進んでいる地域では、医療、教育、福祉で個別支援会議を実施しているという事例の報告もある。その辺をしっかりとやるモデルとして示していくことで少し変わっていくのではないかと、今、それぞれ

の機関で抱えている課題、例えば教育であれば、発達障害で不登校になっている子ども達が多い中で、どう対応していくのか、学校だけではできないような部分をどうするのかという所を含めて、ここは、実務者の部分で考えていくべき所だと思う。

・この事務フロー図等資料の PDCA をしっかりと機能させるための仕組みをもう一度確認する必要があると思う。

〈事務局〉

・委員のおっしゃるとおりで、実務者会議が実績報告のための場になっていたと、岡山県への視察にいったことで、気づき反省して、それを見直すための案を提案事項としてあげたところです。貴重なご意見、ありがとうございます。

〈溝口委員〉

・非常に取り組みの内容は理解しやすかった。

・計画を立てて取り組み、成果をみんなで確認、共有して進めていくことの大切を感じた。

・この部分を各市町村にどのように伝えていくのかということと、それぞれの動きにどう反映させていくかということを考えていきたい。

〈事務局〉

・ありがとうございます。

〈東委員〉

・事前資料をもらって、それと学校現場で自分がやっていたことが繋がっているということが理解できたが、同時に、これだけの事業があるのに、現場にはなかなかそれが降りて来ていない、実感がないと思った。

・学校の先生方は、エイブルの重要性について啓発をしても、なかなか普及していかない。何のためにこれがあるのか、ということが、現場にはなかなか降りてきていないと思う。

・事務局の提案について、教育委員会の中でも実務者会議を実施しており、そこから降りてきた部分について、八重山地区でもやっているが、担当替えにより、その意義が分からなくなったり、ぼやけてしまったりすることがある。行政だと、普段の事務と、前年度までの踏襲で会議を流していく形になり、委員の意見が繋がっていない形での会議の展開に悩むことがある。

・きちんとその意義等についても繋げていく必要があると感じている。今回、対策案として出していることも、意義を含めて繋げていくことが大事だと思う。

〈事務局〉

・実務者会議が、各課の事業を報告する場になっていて、それがどう繋がっているのかを検討する時間が設けられていなかったということを反省して、提案事項とさせていただいた。

・このように県で横断する取組を、市町村に今後は示せていけたらということを考えています。

〈名倉委員〉

・事前に資料をもらえることで、県の発達障害者の取組みについて、非常に勉強になった。

・様々な取組みはしているが、しっかりと機能するような形にしてほしい。色々な課の取組を PDCA サイクルでまわすための会議を作って、さらにその下部組織もあるのだから、もっとより良く機能するような、今行っている取組が実際に必要な人に活かせるような形で PDCA サイクルをまわすと良いと思う。

・テーマ毎に会議をする等も一つだと思うが、一方で、例えば私は、就労の分野を担当しているが、就労はライフステージの中でもいちばん最後になっている。発達障害の方の相談を受けていると、単に障害を抱えていてとか、特性を踏まえただけの問題ではなく、学齢期の経験などが実際には就労時に影響していると思う。

・学校にいる時期に情報がないことで次のステージに繋がっていかないという点もある。就労の分野の方でも、学齢期の取組の情報を持っていないという問題もあるので、テーマ毎に取り組むことも必要であるが、切れ目ない支援が第3期計画の基本方針となっているため、テーマ毎に分かれてやるのももちろん、他の部分も繋がりを持てるような形、違うライフステージの立場にある視点も持って検討できるような取組も考慮してほしい。

〈事務局〉

・実務者会議でどのようなテーマに分けるかというのは、事務局で検討させていただきたい。

・テーマ毎に出された課題については、委員のおっしゃっていた、各分野全員で話ができる支援機関連絡会議で全体の会議の場を持ちたいと考えています。

〈知花委員〉

・資料1の親子通園事業について、二極化という説明が事務局からあった。読谷村も、他の市町村でも同じような状況だと思うが、乳幼児健診後の親子教室、検診後のフォローのため行っていたが、専門職員の確保が難しい点があり、閉めていた経緯がある。中部の市町村での会議で、このテーマが出たときは、1人の専門職員に中部圏域を見ても

らうという案も出ている。岡山の市町村コーディネーターについても、取組として参考とさせていただきたい。

・第3期計画、各市町村の体制図については、資料化することで、自分たちの市町村の弱点や空白が分かるので、県も好事例の提供がしやすいものになっていると感じた。

・切れ目ない支援について、県だけでなく、市町村も大きな課題となっている。様々な部局が色んな発達障害を支援する事業を行っているが、取組を必要としている人にどう見えるか、どう見せるのかが大きな課題である。事業を図式化することで、他部局の職員から、会議などで分かりやすくなったという声もあるので、参考にしてほしい。

・先進地の岡山県に行ったということであるが、発達障害に限定されないが、中部圏域では、障害者雇用を積極的に行っている岡山県の総社市に、年に1回就労部会などで講演してもらっている。発達障害でも岡山県が力を入れているということにあらためて気づかされたので、もしかすると、発達障害のところで支援の必要な人たちをしっかりとフォローしながら、その後の障害者雇用に結びつけていく仕組みがあるのかも思ったので、総社市長にも、岡山県との連携について、機会があれば聞いてみたいと思う。

・一番大きな行政の課題としては、繋げること、あるいは、どのような行政サービスが強い又は弱いのかをはっきりさせるといことが、住民に分かりやすいと思うので、引き続き県と連携しながら取り組んでいきたい。

〈事務局〉

・ありがとうございます。

〈仲村委員〉

・センター連絡協議会のまとめについて、これだけ計画の中で様々な取組が行われているが、現場では、課題が生の意見として出てきていると感じる。この意見については、今後どのようにして課題をクリアしていくのか、県も一緒に検討してほしい。

・計画冊子の17ページの記載について、保護者や家族に対する支援の中で、ペアレントトレーニングやペアレントプログラムの普及ということがあげられているが、ペアレントプログラムは、早期の段階での親の支援というところで、障害がある子もない子も支援する取組の一つであると感じている。実際必要だが、予算や人材で課題があるとする市町村がたくさんある。この辺の、バックアップの取組を県がどのように行っているのか聞きたい。

・今後児童発達支援センターが人口規模に応じて設置されていくと思うが、そのバックアップ機能について、県や市町村がどのように行っていくのかも聞きたい。

〈事務局〉

・ペアレントトレーニング等の普及については、市町村発達障害者支援体制サポート事業にて市町村が実施する際のバックアップを行っている。

・また、中核的な支援を行う人材として、障害児療育等支援事業等を受託する事業所に人材をおいて、ペアトレ等の普及を行ってもらっている。

・そういった人材を活用しながら、最終的にはペアトレ等を市町村で実施してもらうことをイメージとして持っている。

・予算について、国のメニューでも利用できるものもあるが、まだまだ国庫補助メニューの周知不足な面もあるため、今後、市町村向けの研修などで周知を行って行きたい。

〈仲村委員〉

・児童発達支援センターのバックアップは、県や市町村でどのように具体的に行っているのかも聞かせてもらいたい。

〈事務局〉

・児童発達支援センターは、事業発達支援事業所や、放課後等デイサービスといった、療育指導等個別のサービスを行うだけではなく、地域支援の役割も含まれてきます。地域支援を今後どのようにやっていくかについては、市町村発達障害者支援体制サポート事業の活用や、療育等支援事業所も地域支援の役割を担っているので、そこから市町村のサポートも想定しているところです。

〈原田委員〉

・資料3、30ページの課題4について、系統的人材育成に向けた研修のあり方や、待機解決に向けた問題については、今までもずっとある。

・琉球病院では子どもの心診療ネットワーク事業の拠点病院をさせてもらっていて、こういったことに取り組んでいけないといけませんが、なかなかネットワークを作ることが難しく、拠点病院だけで研修会の開催やドクターに来てもらってバイシンしてもらったりして、そういった形での教育を行ってきた。ただ、拠点病院だけで行っても、地域のニーズに合っているのか、ドクターをどのように研修させたらいいか迷っているといった状況が続いていた。

・児童精神や小児精神の先生が集まって勉強会を開催しているが、一度その先生方に集まってもらって、医者たちの顔の見えるネットワーク会議の様なものを開催してはどうかということを提案した。そこでどのような研修会をしたらいいか、どのような講演会をしたらいいか話し合いができたらと思い、そういう提案をした。

・今日委員のみなさんの意見を聞くと、顔の見える会議があった方がいいという希望があったので、具体的には決まっていないが、地域の児童精神科医療や小児精神の臨床で実際やっている先生たちからのニーズもあったので、県の担当と相談しながら、会議を

開催する予定である。

・発達障害の教育というのは、実際臨床をやってみると、二次障害が一番の課題となっていて、そのために家族が苦しんでいたりと、医療に期待する部分が多かったりするので、自閉症や ADHD の診断だけでない二次障害を含めたケアについて、研修の中で学んでいく必要があると思う。そのためには、児童精神科や小児精神科など様々な分野の先生方に集まってもらって、人材育成で大事なものは何かを考え、研修会等を考えていくと思う。

・それによって、診断待ちや、困っている家庭に対して、発達障害が近場の病院で診られるような形で、また、難しい症例になってくると、琉球病院が専門的にやっているので、より精神的な患者さんは、こちらで引き受けて、よりプライマリーケアで落ち着く方は地域の小児科・精神科で見えていただくという連携ができると、待機問題も解決していくのではと思っている。

〈事務局〉

・委員のおっしゃるように、1次、2次、3次医療機関の役割の整理等も今後も必要になっていくと考えております。障害福祉課でも、かかりつけ医等発達障害対応力向上研修事業で研修を行い、裾野の部分を広げてはいるが、受講する医師数が少なかったり、国の研修に派遣する医師がなかなか見つからなかったりと、課題を抱えている部分もあります。

・その点においても、今あるテーマ毎の課題を実務者会議等で話し合い、各課で繋げていくことが出来ればと考えています。

〈事務局〉

・実務者会議は、その充実が求められていると感じております。今、庁内で行っている実務者会議が、報告で終わっているのは、反省するところです。

・研修についても、教育庁、保育の主管課、障害福祉課で行っている研修など、重複していたり、時期が近かったり、各課で行っている事業の確認まではできていない点もあります。それを確認する中でも、研修のあり方やどの課がどういったことを重点的にやるのかを整理できれば、県全体の会議や研修が充実していくと感じています。

・その辺りの課題を掘り下げた形で、実務者会議で調整が出来ればと良いと感じているところです。

(開会)

以上